

文献を用いて自身の看護を振り返る。【結果】治療が進むにつれて出現する身体的苦痛を一つ一つアセスメントし、早期に必要な情報や看護を提供していくことで苦痛を軽減することができた。また、不安を打ち明けられる信頼関係を築くことで、漠然としていた不安が具体的な不安へと変化し、一つ一つ解決に導くことができた。苦痛や不安が軽減することで、患者に少しずつ笑顔も見られ、前向きに治療に臨めるようになっていった。【結語】看護師が患者の個性を考えながら親身になって関わっていくことが大切である。患者が感じている苦痛を理解し、その苦痛を取り除けるように統一した看護を行なうことが重要である。

11. 「ケアマップを使用した患者ケア時の看護師の認識」について

一ケアマップ見直し前後のアンケート調査から一

下山千鶴子, 小坂橋由美子, 小林 美幸

土屋 智子

(群馬大医・附属病院・南6階病棟)

松井佐知子

(群馬大医・附属病院・南7階病棟)

及川 洋(群馬大医・附属病院・教育担当)

【目的】看護師用ケアマップの問題点を抽出し、使い易い新ケアマップを作成・使用し、その有用性を評価する。【方法】ケアマップについて研究対象者へアンケート調査を行い、問題点を抽出。結果を元に新ケアマップを作成し3カ月間使用した後、同対象者に2回目のアンケートを実施し、新ケアマップの有用性や看護師の認識の変化を調査した。【結果】1回目の調査では【やや分かりにくい】という回答は46%で、その理由は「言葉のみでグレードが判断しにくい」、「軟膏の選択に迷う」等であった。2回目の調査では【非常に分かりやすい】と【やや分かりやすい】を合わせて96%と著明に増加した。【結語】1. 皮膚状態のグレード別に精細なカラー写真を載せ、ケア方法や注意事項を分類し具体的に記載することが重要である。2. 使用薬剤や注意事項は最小限とし曖昧な記載は避ける。3. 判断に迷うケースでは他部門との連携を図り、最新のスキンケアを提供できるよう情報を共有する。

12. 放射線治療に対する不安へ他部門連携を通じて効果的に介入できた一事例

国定 茉依, 中村 真美, 篠田 静代

高野 良子, 今井 裕子

(群馬大医・附属病院・北6階病棟)

【目的】膵臓癌は予後が悪く、放射線治療は患者にとって効果が見えにくいことから、治療に対する不安を抱きやすい。患者が治療をスムーズに進めるためには、入院後早期に不安を把握し介入する必要がある。そこで効果的に介入できた一事例を振り返り、今後の看護の参考とする。

【方法】当病棟で膵臓癌化学放射線治療を受けた患者への看護を看護記録をもとに振り返る。【結果】入院前に苦痛のスクリーニングを行い患者の苦痛を把握したことで、入院後早期から心のつらさや不安といった精神状態に配慮し、他部門と連携して患者が思いを表出しやすい環境を作り、治療を最後まで行うことができた。【結語】結語]放射線治療をスムーズに進めるためには、患者の精神状態に配慮し、他部門と協力しながら患者が思いを表出しやすい環境を作っていくことが重要である。

13. 子宮頸がんで化学放射線療法を行う患者へのセルフケア行動を支える看護

山崎 多恵, 福田 淳子, 櫻井 通恵

(群馬県立がんセンター 4病棟東)

【目的】化学放射線治療を受ける患者に対し、有害反応出現時のセルフケア行動を支える看護の振り返りを行った。【方法】症例研究。症例は50歳代女性、子宮頸がんII b期の患者。化学放射線療法(53日間)。【結果】有害反応による下痢と便秘を繰り返していたが下痢への不安が強く排便コントロール困難であった。そこで「効果的的自己健康管理」を立案し、治療の段階に沿って有害反応の症状や予防策を伝え、自身でコントロール出来るよう介入を行った。その結果セルフケアが行えるようになった。【結語】看護師は、患者の治療段階に応じて出現する有害反応の症状や出現時期、それに対する予防策を伝え患者自身で判断して行動出来るよう教育を行い、支持的態度で関わる。そして成功体験が得られるよう言葉がけを行っていくことが重要である。

14. 放射線治療を安全に完遂するための看護介入

齋藤 潤子, 福田 淳子, 櫻井 通恵

(群馬県立がんセンター 4病棟東)

【目的】治療だけでなく日常生活において理解不足が目立つ患者が、放射線治療を安全に終える為に行った看護援助に対する振り返りをし、今後の看護実践に活かす。【方法】対象患者A氏に立案された看護計画と看護記録の振り返りを行う。【結果】おおきな有害事象はみられずに治療は完遂できた。看護計画に基づき生活援助を含めたケアを行い、自主的な清潔行動や有害事象への予防行動がとれるようになった。初回の腔内照射後不安の訴えがあった為、治療中に付き添いし不安の軽減がはかれた。【結語】理解力の乏しい患者でも有害事象の予防を含めた生活指導を続けることでセルフケアができるようになる。特殊性の高い治療は不安軽減のために患者の理解度に合わせた個性のある指導が必要である。